



SUSAP 2019

ラトローブ大学プログラム

8.21~9.28

〈参加者プロフィール〉



高尾 樹（団長）
教育学部 学校教育課程小中連携コース
初等主免 2年

自分の英語のリスニング能力とスピーキング能力を高めるため。
また多国籍国家の文化の違いを知りたいと思い参加した。



宮崎 琴子（副団長）
農学部
生物資源科学科 1年

オーストラリアの多文化社会の中で自分の英語力を磨き、視野を
広げる機会にしたいと思い、この研修に参加した。



渡部 夏未（編集委員）
教育学部
学校教育課程 2年

海外での生活を通して異なる文化や価値観に触れてみたいと思
い参加した。またオセアニアの教育制度に興味があり、授業を実
際に受けてみたかった。



山口 実穂（編集委員）
芸術地域デザイン学部
地域デザインコース 2年

英語圏で生の英語に触れながら自分自身の英語能力を向上させ
たいということと、もともと国際交流にも興味があったため多
国籍国家のオーストラリアでこそできる経験もあるだろうと思い
参加した



桒尾 卓也（編集委員）
理工学部
理工学科 1年

多文化社会の中で生活する学生や現地の大学に興味があり、オー
ストラリアで自分の中の文化や人に対する価値観を変えてみた
いと思い参加した。



堀 素乃
教育学部
学校教育課程 2年

長期留学にむけて短い期間の留学プログラムを経験することで、
異国の地での生活を知るとともに自身の英語力を試したいと思
い本研修に参加した。



田中 麻祐
農学部
生命機能科学科 2年

英語を話す環境で、自分の実力を知りたく、また少しでも能力を
あげたいと思い参加した。



中野 将尊
理工学部
理工学科 1年

海外に行ったことがなかったからです。自分の視野を広げたか
ったからです。



井手 綺音
農学部
生命機能科学科 2年

日本ではなかなか伸ばすことのできないスピーキング能力を実
際に現地の人との関わりの中で伸ばしたくてこのプログラムに
参加しました。



小池 麻友
教育学部 小中連携コース初等教育主面免
2年

英語スキル、特に苦手意識のあるスピーキング能力を向上させ
たため、またオーストラリアの多文化社会に触れてみたいと
思い参加した。



伊藤 周昌
理工学部
理工学科 1年

将来、海外で化学者として仕事をしたいと考えていて、留学を最
低でも1度は経験して、語学力の向上と異文化との交流をしてお
きたかったから。



川野 茉奈果
農学部
生命機能科学科 2年

実際に英語を使って生活することで、英語力を身につけるととも
に、オーストラリアの文化を体験したいと考え本プログラムに参
加した。



高柳 太慎
経済学部
経済学科 3年

言語力はもちろんコミュニケーション能力などを伸ばすことを
目標に多くのことを成長させるため当プログラムに参加した。

プログラム概要

【期間】 2019年8月21日(水)～9月28日(土) (39日間)

【留学先】 ラトローブ大学 La Trobe Melbourne (ラトローブ大学附属語学学校)

【内容】 プレースメントテストの結果により General English または Academic English のクラスにレベル別に細かく配属される。週に 20 時間の英語の授業を受講する。日本文化に関心のある学生バディが一名ずつ付く他、日本語サークル Hakamanakama との交流などがある。また、ホームステイを通して多民族文化を直接体験する。

ラトローブ大学について

ラトローブ大学は、オーストラリアヴィクトリア州メルボルンに位置し、学生数 26000 人、南半球最大のキャンパスである。3000 人の留学生も在籍しており、教育のレベルは高い。学部は、教育、人文社会学、健康科学部、法律経営学、理工学部がある。緑が豊かな広大な敷地内には多くの野生動物が生息し、美しい恵まれた環境の中で学ぶことが出来る。多国籍の学生達に配慮し、様々な国の料理を食べることが出来たり、イスラム教徒の礼拝堂があったりした。図書館は学生が思う存分に勉強するための設備が整っており、スポーツセンターや娯楽施設なども利用することが出来た。

授業

クラス編成は、General English、Academic English の中でレベル別に細かく分かれており、週 20 時間、一日 4 時間の授業を午前と午後に受ける。ユニークな授業スタイルで日本とは違い、ディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイなどを行った。特に発音や意見交換が重視された。週一回 writing のテストがあり、テーマに沿って英作文を作成し細かい添削を受けた。四技能ともにバランスよく向上することが目指される。基本的にグループワークやペアワークで活動し、発言も多くみられ、先生も聞き取りやすいはっきりした発音で発問したり、新しい単語をたくさん教えてくれたりする。特に listening, speaking 力が大きく向上したと思う。

交流

バディとは全員でご飯を食べに行ったり、昼休みや放課後に個人的にあって会話したり、週末には観光地を巡ったりした。日本語が話せる人が多く、ラトローブやメルボルンのことを教えてくれた。プレゼンテーションの原稿を添削してくれる人もいた。

クラスメイトには様々な国籍出身の人が在籍しており、一度にたくさんの国の文化を比較しながら違いを見つけたり、学んだり

できた。フレンドリーで優しい人が多く、会話するのが日に日に楽しくなった。昼休みは一緒にご飯を食べ、放課後は一緒に課題をしたり近くのショッピングセンターに遊びに行ったりした。週末には計画を立ててシティに遊びに行つて忘れられない思い出を作ることが出来た。

Hakamanakama 日本語サークルの活動にお邪魔して、日本語で会話しながらゲームなどをした。そこでも交流の輪が広がった。皆日本のことが大好きで、異なる言語を学ぶ難しさや留学に関する悩みも理解してくれた。様々なイベントも用意してくれた。

ホームステイ

英語力向上のための最も大きな要因は、ホームステイでの生活にあると思う。メルボルンで気持ちよく過ごせるように手厚くサポートをしてくれ、会話も積極的にしようとしてくれた。バックグラウンド、移民、多国籍国家、文化について様々な話をしてくれた。家庭料理には日本では食べたことのない食材や味付けのものが提供された。主食はパスタ、タイ米、ジャガイモ、パンなどをローテーションで食べることが多い。毎日のファミリータイムを大切にしており、子供とのスキンシップや会話は日本の家族よりも多かった。本当の家族のように大切に扱ってくれて、ストレスなく 5 週間を過ごすことが出来た。

交通機関

普段利用する交通手段としては、バス、トラム、電車だった。トラムとはメルボルンを走る路面電車のことで車道の真ん中にトラム用の線路が引かれていてその上を走る。バス停のようにトラムの停留所があり、そこから乗って目的地の周辺のトラムの停留所で降りる。私たち佐賀大学生もこのトラムに乗ってラトローブ大学に毎日通っていた。土日は平日より安く乗ることができたり、フリートラムゾーンというある区間内であれば無料でどこまでも移動できたりしてとても便利である。そのため土日はトラムでメルボルン市内の色々な場所に行くことができた。また、この 3 つの交通手段を利用するにあたって myki カードという交通カードを使って利用料金を払う。バスやトラムによって乗る際も降りる際もタッチしなければならない時もあれば、乗る際のみタッチすればよい時もある。私たちはこの myki カードがあればどこでも行くことができた。しかし時刻表の時間より遅れて来ることが少なくなく、学校に遅れたり、土日の待ち合わせ時間もなかなか間に合わなかったり、待ち合わせ時間をずらさないといけなかったりすることも多々あった。Uber という個人タクシーもあり、これはアプリを使って呼ぶ。公共交通機関よりは少し高いがオーストラリアの人々に絶大な信頼を得ていた。

物価

極端に高すぎるというわけではなかったが、日本に比べたら比較的高いものもあった。カフェやレストランでの食事は特に高かった。ものによってはオーストラリアの方が日本より安いものもあった。お店に行くとお個で〇〇ドルという表示が多く、たくさん買うとその分安く買えるというお店やものが多かった。オーストラリアの主なスーパーマーケットは“coles”と“woolworths”という2つのチェーン店があり、そこで買い物をすると安く買うことができた。

ファストフード店では Freeze というファンタやコーラなどの炭酸飲料がシャーベット状になった飲み物があり、それはどこでもサイズを問わず 1 ドルで売っていてとても安かった。

ランチ(レストラン等)	16～20 ドル
ランチ(学内カフェテリア)	10 ドル
コーヒー	3.5～4.5 ドル
水(自販機)	3.5 ドル
ジュース(ペットボトル)	2～3 ドル
パン(スーパーマーケット)	2～3 ドル
チョコレート菓子(スーパーマーケット)	2～3.5 ドル

食事

オーストラリアはこれといった独特の食文化というものは無く、たくさんの国や地域の食文化によってオーストラリアの食文化が成り立っているという印象だった。韓国、中国、その他たくさんの国々の料理のお店が個々に並んでいて色んな国の食事を楽しむことができた。大学内にもカフェテリアがあり、様々な種類の料理があるため日替わりで料理を楽しむこともできた。日本料理は寿司のチェーン店が非常にたくさんあり、sushi と書かれた看板があちこちに見受けられた。その寿司のお店ではシャリにネタがのっている寿司は少なく、カリフォルニアロールや海苔巻き型の寿司が多く売られていた。値段は日本よりも高かった。また、ホームステイしている家でのご飯は色んな種類の料理を出してくれる家もあれば、ホストファミリーの出身地によってその国ならではの料理を出してくれる家もあった。量が多かったり、野菜よりは肉料理中心だったり、本当にホームステイ先によって出てくる料理に特徴があった。

放課後や週末の過ごし方

放課後は帰り道にあるショッピングセンターやアウトレットモール等に行くことが多かった。そこでは多民族国家であるオーストラリアならではのバラエティ色豊かで様々な文化に対応

した商品がたくさん並んでいた。学校終わってすぐメルボルン市内へ出かけて教会などのちょっとした観光地に出かけることもあった。カフェに行く計画をしていた時もあったが、どこのカフェも16:00、遅くても17:00に閉まるところがほとんどで、放課後にカフェでお茶して過ごすということが出来なかった。週末はおもにメルボルン市内に出かけることが多かった。私たちが住んでいるホストファミリーの家からメルボルン市内まで約 1 時間、そこから目的地までも約 30 分から 1 時間にかかるため、移動時間は最低でも 2 時間弱はかかった。土日は学校に行く時間よりも早起きして家を出ることが多かった。美術館、図書館、動物園、カフェ、マーケット、テーマパーク、ビーチなど 1 日の中でもトラムを使って色々な場所に行くことができた。日本とは違って美術館や図書館は規模が大きかったり、カフェは雰囲気が違ってよりおしゃれであったり、何よりビーチがすごく綺麗で感動した。ただオーストラリアは天候が非常に変わりやすく、すごく晴れていたと思いきや急に雨が降ってくることが 1 日の中で何度も起きることが多々あって大変だった。折り畳み傘は常に必須の持ち物だった。

まとめ

5 週間は長いようであっという間に過ぎていった。現地でのたくさんの方々に支えられ無事に過ごすことができた。オーストラリアは教育に力を入れている国であり留学生も多いということで私たち自身も集中して学習に取り組むことができた。この 5 週間オーストラリアで得たことを生かしてこれからも英語学習に励みたい。

「外国に行ったからこそ知れたこと」 教育学部学校教育課程小中連携コース初等主免 2年

高尾 樹

私はオーストラリアのラトロブ大学のプログラムに参加しました。短期留学をするのは今回2回目でした。ですが1ヶ月と少し長い期間だったため、前留学した時よりも様々な文化の違いや日本の良さをたくさん感じることができました。

1つ目は言葉の違いを感じました。オーストラリアは昔イギリスの植民地だったこともあり、私たちが習っているアメリカ英語ではなくイギリス英語を使っていました。そのため発音の仕方が異なることもあり、その発音に慣れるまでは英語を聴き取ることに苦労しました。大学では中国・韓国・オマーン・サウジアラビアなどから来た生徒たちと一緒に授業を受けました。そのためそれぞれの国の訛りがあり、特に巻き舌のある英語を話す人たちと話すときが1番苦労しました。そのため多文化の国に行った時には、相手が話したい英語を想像しながら聴くということが大切になると感じました。

2つ目は日本の英語教育が試験用英語になってしまっていることを改めて感じさせられました。様々な国の人々と混じって授業を受けていたため、日本人以外とペアを組むことが多かったです。そのペアとともに教科書を使い英語を学んでいく中で、日本人は文法問題や長文の読解問題の正答率が高いですが、言葉で説明する時の英語がスラスラ出てこずつまってしまうことがよくあることを感じました。一方、日本人とは逆で文法問題や長文読解の正答率は低い、スピーキング能力が高いクラスメイトたちがいました。日本人のスピーキング能力の低さ感じて、グローバル化が進む世界でスピーキング能力は欠かせないので、これから外国人と話す時に困らないような英語を教育現場で教えていかなければならないと思いました。スピーキング能力を鍛えるために文法や長文を疎かにするとまた新たな問題を生んでしまう可能性がある、ALTのいる授業を効果的なものに変化させたり、実際に使える英語を教えたりすることが大切だと思いました。例をあげるならば、”How are you? I’m fine. Thank you. How about you?”というやりとりです。日本ではこのやり取りをよく習います。しかし留学をしてこのやり取りは堅苦しいと思いました。それは買い物の際にレジに行った時や知っている人とすれ違う時など短時間しかない場面でも挨拶がわりにこの言葉をネイティブたちはよく使っていたからです。だから私はネイティブたちがどのような返事をしているのか盗み聞きして真似してみたり、ネットで調べて実践してみたりしました。このような英語を日本での実際の授業の中から取り入れていけたらいいと考えました。

3つ目は文化の違いです。まずは閉店時間の違いについてです。オーストラリアのカフェやショッピングモールは夕方には閉ま

っていました。日本では夜遅くまで開いていることが多く、仕事や学校帰りに行く所だと思っていたので閉店時間が早いのを不思議に思い聞いてみると、オーストラリアの人々は夕方以降は家族と過ごす大切な時間にするとわかりました。日本は家庭によって異なるので、国民全員でそのような考えを持ち、それが実現できるような働き方にしているのはとてもいい試みだと思いました。次は誕生日ケーキについてです。私はオーストラリアでできた友達とホストシスターと自分の計3回の誕生日会をオーストラリアで経験しました。日本では歌を歌ってもらって歌が終わったらすぐにロウソクの火を吹き消しますが、他の国では願いを願ってから火を吹き消すそうです。そうとは知らず、私がすぐに火を吹き消した時にはホストファミリーに驚かれました。このような小さなところにも文化の違いが現れるので、海外に行く際は気をつけないといけないと改めて思いました。

4つ目はそれぞれの国のいいところについてです。まずは日本の良さについてです。日本ではフードコートで食べたゴミなどは自分で捨てて机を拭いて帰ったり、バスの運転が丁寧だったりします。オーストラリアは日本の逆でした。私が日本のここいいと感じられたところに共通することは、1人1人の心配りによる行動だと思いました。次にオーストラリアの良さについてです。オーストラリアは多民族国家です。そのため黒人や白人、黒髪やブロンドヘア、中国語やアラビア語を話す人など色々な人種の人々が混在していました。日本で外国人を見たり英語を聞いたら、多くの人が振り返ったり、あ！と何かを思ったりすると思います。しかしオーストラリアは色々な人種の人が多く、違う国籍だからと浮くようなこともなくとても暮らしやすい国だと思いました。

今回約1ヶ月間オーストラリアで過ごしてみて、オーストラリアに行ったからこそ文化の違い、日本の良さやオーストラリアの良さを感じることができました。また大学の授業を通して様々な国の人たちと繋がることができ、それぞれの言語を教えあってそれを使って挨拶をしたり、それぞれ国の綺麗な場所の写真を見せ合ったり文化を伝えたりしました。オーストラリアに行ったのにたくさんの国のことを知れたのは、オーストラリアが多民族国家であることも関係していると思うので、留学先にオーストラリアを選んで良かったと思いました。今年の夏留学をして、もっと英語を上達させて言葉の壁なく会話をしたいと思った気持ちを忘れずに大学生活を有意義なものにしていきたいと思います。



クラスメイトとシティ巡り

「オーストラリアでしか得られなかったもの」

農学部生物資源学科 2年 宮崎 琴子

この5週間は私にとって長いようで短いものだった。しかし同時に、とても充実した5週間を過ごすことができた。今回のオーストラリア滞在で、日本では気づくことができなかったであろうことや、得られなかったであろうことがたくさんあった。

その中でも特に、自分にとって大きな経験の一つが、大学での授業だった。クラスでは中国、台湾、サウジアラビア、オマーンといった様々な国の人たちと英語を勉強することができた。皆、授業にとても積極的で分からないことや、理解できなかったことがあれば、すぐに先生に尋ねていた。先生も嫌な顔ひとつせず理解できるまで、しっかり説明してくれる。私は日本では、分からない、理解できないといことに対して、少なからず恥ずかしさや怖さを感じていた。しかし、彼らと一緒に授業を受けていく中で、分からない理解できていないことを放置することのほうが問題であると感じた。周りの生徒は皆一方的に授業を聞くだけでなく、学ぼうとする姿勢がとても強かった。最初は圧倒されていたが、間違えを恐れてばかりいてはいけない、自分も強気でいこう、と考えるようになった。それから、積極的に発言ができるようになり、より授業が楽しくなった。日本では、なかなか破れないような殻が破れたのも、周りのクラスメイトのいい刺激を受けたからこそだと思う。

さらに、今回のホームステイでちょうど同じ家にベトナム人の女の子がホームステイしており、彼女と生活することができた。生活する中でももちろんホストファミリーからもたくさんのアドバイスをもらった。しかし、そのベトナム人の子からももらったアドバイスは自分にとってとても励みになるものだった。初めて会った時から彼女はとても英語が上手で、自分が英語でスムーズにコミュニケーションが取れないことにすごくへこんでいた。ある日、私は彼女にどうすればそんなに英語が上達するのか尋ねた。すると彼女は意外にも、最初オーストラリアに来た時は自分も全く英語ができなかったという。また、普段のコミュニケーションにおいて文法を意識しすぎず、とにかくしゃべることが大切だと教えてくれた。失敗しても、みんな自分が英語を完璧にしゃべれないのはわかっているし、分からないことも教えてくれてその都度覚えればいい。気にし過ぎていたら、何もできない。私もそうやって上達したということだった。確かに文法を気にし過ぎて、発言することに臆病になっていた。彼女のアドバイスを受け、私は少しずつではあるが積極的にクラスメイトや、ホストファミリーとの会話が増えていった。そのおかげか、オーストラリアに来た時より、僅かではあるが英語が上達した気がする。私と同じように母国語が英語ではないが、英語を使いこなせるまでのレベルに至っている彼女からのアドバイスはとても貴重なものになった。

そして、この5週間を通して、メンタルの面で成長できたと思う。人それぞれ考え方や捉え方が違う中で、予想外のことや自分の意見をしっかり伝えなければならない状況が多々あった。NOと言われることに怯みそうになるが自分の意見、考えを持つだけでなく、それをしっかり言葉にして伝えることができるようになった。問題が起こっても、感情的にならず、冷静に考えることもできた。自己解決能力が鍛えられたと思う。5週間前よりか心なしか、メンタル面で一回り成長できたと思う。

オーストラリアは多文化社会であることは知っていたが、実際に生活している中で周りには様々な言語が行き交っていた。一度にこんなにたくさんの言語を耳にする機会もそうないだろう。また、英語一つとっても、人によってアクセントや発音の癖が大きく異なることに驚いた。最初は慣れるのに苦戦したが、同時私にとって新しい発見だった。クラスメイトと仲良くなる中で、それぞれの国のことや言葉を教えてもらった。自分のそれまでのイメージとは違うことがたくさんあった。こういった経験は日本ではなかなか得ることができないかけがえのないものばかりだった。その中で文化や言語は違えど、様々な人と会話ができる喜びと英語の存在の大きさを強く感じた。同時に、もっと自分の英語力を伸ばしたい、もっと自分の視野を広げたいと思うようになった。このような経験が得られたのは、オーストラリアの多文化社会があったと考える。この5週間はとても刺激的で、自分にとって改めて英語に向き合う大きな原動力になった。このような素敵な経験をさせてくれた、両親、ホストファミリー、大学にはとても感謝している。この経験が無駄にせず、得たことを糧に努力を続けたいと思う。



「新しい発見」

教育学部 学校教育課程 2年 渡部夏未

私はラトローブ大学プログラムに参加して、5週間の中で様々なことを吸収し、以前とは少し違う考え方を待った自分になったと思う。大きく分けて、価値観、自信、観点の3つである。

ホームステイをしたことでオーストラリアの一般家庭における日常生活の過ごし方を知ることが出来た。またライフスタイルについて、直接質問してみても見えてきたことがある。それはオーストラリアの人々は家族や友人と過ごす時間を仕事よりも大切にしていることだ。それゆえ、仕事は早めに切り上げ、街中のショッピングやカフェは早々と閉まり、そこからはリラックスして過ごす。週末は、ゆっくり起きてランチを食べ、お気に入りの場所に出かけたり、本を読んだり、友人にあったりする。日本と比べるともっと穏やかに過ごしていて、隣人との交流も深い。リラックスする時間を積極的に作ろうとしている印象だった。このような生活をホストファミリーと一緒に送り、自分の今までの生活を振り返った。「リラックスする時間」を作ろうという意識が今までではなかった。授業以外の限られた時間の中で、予定を詰めるだけ詰め、むしろ時間がもったいないと考えていた。しかしせっかく自分の趣味や挑戦したいことがあるのに、それに時間を作らないのは自分のことを大切にできていないなと思った。時間の使い方は人それぞれだが、私の場合は自分の時間に対する価値観が変わった。

加えて、はじめて海外で暮らした経験が、自分の中で自信につながったと感じた。私は今までどんなことをするにも、「緊張しそうだな、難しくないかな、出来なかったらどうしよう。」という不安を持っていた。このプログラムに参加するのを決める時も不安のほうが大きかった。だが5週間の中で毎週プレゼンテーションをしたり、グループディスカッションで意見を認めてもらえたり、いろんな観光地を自分たちの力で巡ったりして、どんなこともやってみると案外楽しく、自分にもできることはまだまだあるのだということがわかった。無理だと決めつけるのは、もったいないことだ。まだ大学生活は半分残っているため、自分から何か行動を起こしてチャンスをつかみにいかなければと感じた。

最後に、多民族な文化に触れたことで、ものの見方が変わった。日本で普通に暮らしていると、外国の方はよく目にするものの、あまりその人達の文化はわからない。実際にオーストラリアで暮らしてみてそれぞれの文化を尊重した施設の在り方や、他の文化に寛容的な人々の観点を知った。また、クラスメイトには様々な国籍の人達がいた。オマーンやサウジアラビア、韓国、中国について話をたくさん聞けて、もっと外国のことについて知りたいと思った。私はサウジアラビアの人とディスカッションをする機会が最も多かったので、国や文化をどのようにとらえているのか、

宗教に対する忠実心を教えてもらった。オーストラリアの文化やオーストラリア料理を説明するのは非常に難しいと現地の人は話していた。なぜなら、それらは様々な国から入ってきたものの融合だからだ。さらに細かく言えば、アボリジニ、イギリス王朝、多民族の文化の融合である。だからこそ現地の人々は様々な観点が存在することを良く分かっており、それに対して寛容的なのだ。逆に日本はどうなのか。日本文化は昔から存在するものという観点からみれば、着物や日本食などである。だが今日では様々な国の文化との融合ともいえる。日本文化を詳しく見てみると新しい定義が出来そうだ。国の文化を様々な観点から見ると面白い。それによって、新しく見えてくるものがあるのだ。

自分の常識を覆すような、いつもとは違う刺激をたくさん受けたことで、今までとは違う考え方を手に入れることが出来た。それは、今までの自分の考え方を捨てたということではなく、簡単に言えば視野が広がったということだ。たくさんの新しい発見をすることが出来、その一つ一つが楽しかった。日々の意欲向上と継続のためには、この「新しい刺激」が必要なのだと考えた。今回得た経験を生かして、これからの計画をしっかりと立てていこうと思う。



「オーストラリアで感じたこと」

芸術地域デザイン学部地域デザインコース 2年 山口実穂

国によってその国ならではの国民性、性格がある。私が今回留学したオーストラリアはオーストラリア単独の文化ではなく、様々な国からたくさんの人たちが移住して出来た多民族国家である。だから人々の性格も地域性ももちろん様々である。少しでも気に障ったら怒られるのではないかと、日本人はおかしいと思われるのではないかと、と不安なことも少なくなかった。しかしそんな不安だと思っていたことが起きることは全く無く、色々な国の人々が集うオーストラリアで「人の温かさ」を感じるたくさんの出会いを経験した。

まず、私のバディである。彼は私たちが留学したラトローブ大学で日本語を勉強していた。私が英語で話す必要が無いほど日本語が上手くて、日本がすごく好きな人だった。授業で出た宿題を手伝ってもらったり、最終プレゼンの原稿を1つひとつすごく丁寧に訂正してくれた。オーストラリアにいる間ずっと気にかけて連絡してくれて、初めてのオーストラリアである私にとってはとても優しく心強い存在だった。

次に、私のホストファミリーである。ホストファミリーと言っても私はホストマザー1人の家にホームステイした。「恥ずかしがらないで気軽に何でも言って！ここはあなたの家で、私はあなたの第2のお母さんだから」と来たばかりで緊張している私に笑顔で声をかけてくれたことを今でもはっきりと覚えている。毎日夕ご飯は違う料理を用意してくれて、イタリアン、フレンチ、韓国、中国、また日本の天ぷらもネットで作り方を調べて私のために作ってくれた。毎日たくさん作ってくれて本当にどれも美味しいものばかりだった。留学期間の中盤くらいに佐賀大学生全員を招いてパーティをしてくれた。そこではホストマザーが「家に招いたからにはお店でテイクアウトできるピザよりも家庭の料理を食べて欲しい」と前日から私が知らない間に1人で13人全員分の手作り料理を快く用意してくれた。その後も「私たちの家に来てくれた佐賀大学生はみんな元気にしてる？その子たちのホストファミリーは大丈夫？」などと気にかけてくれた。また、毎日「あなたの家族はお父さんもお母さんも元気にしてる？」と声をかけてくれた。自分のことではなく、私や私の周りの人たちをととても気遣ってくれる本当に温かいホストマザーだった。

最後にクラスメイトである。サウジアラビア人、オマーン人が比較的多く、なかなか私はクラスに馴染めずにいた。彼らは先生の話の途中であっても先生に質問し、自分の意見を積極的に述べていた。日本の大学で英語を教えていた経験のある私のクラスの先生によると、日本人は文法やライティングは得意だけど話すことは得意じゃない、サウジアラビア人やオマーン人は

話すのは得意だけど文法やライティングは得意じゃないと言っていた。最初はそんなクラスメイトと一緒に授業を受けていて、仲良くなれるか不安だった。しかしグループワークでも私の拙い英語でも一生懸命うなずいて聞いてくれて、なかなか上手く伝えられないときは補助してくれた。またプレゼンの時は私の本番前に「深呼吸して！大丈夫だから！」と励ましてくれて、あまり終わってからでも「完璧なプレゼンだった！」と一人ひとりが褒めてくれた。最終的にはこのクラスメイトで本当によかったと思える明るく優しいメンバーだった。

また、現地人の方に道を聞いた時は誰でも優しく丁寧に答えてくれた。目的地を伝えるとそこまでの行き方を何度も丁寧に教えてくれて、近くまで一緒に行ってもらったこともあった。

私は今までも佐賀大学で留学生チューターや日本語ボランティアをしてきた経験はあったが、私は留学生に向けて日本人として、オーストラリアで出会ったバディ、ホストファミリー、クラスメイトのように優しく温かく接することができていたかと振り返ってみるとそうではないような気がする。

オーストラリアに留学に行く決めてからは楽しみももちろんあったが不安も多かった。私は今まで日本語を勉強しに来ている外国の方や日本が好きで日本の文化をある程度分かっている海外の人だから安心してコミュニケーションをとることができた。しかしお互いの国のことを知らず、お互いの文化も全く分からない人とコミュニケーションをとることを想像するとそれをどこか少し怖がっている自分もいた。また、海外は韓国に留学に行ったことはあったが、近い国であり観光客が多いこともあり、日本語を話せる人もいて日本語の案内がある場所が多かった。しかしオーストラリアは日本語の案内や日本語の環境が身近ではなく、それがもちろん英語を学ぶ環境には最適なのだが、街中で日本語が聞こえてくると安心したし、日本料理の店を見かけるとどこかホッとした気持ちになった。

現地の言葉がそこまでできないままチャレンジの気持ちで留学したのはよいものの、留学する側はこんなにも不安だということが分かった。佐賀大学に海外から留学する留学生、また佐賀大学に限らず海外から留学や働きに日本へ来る外国人がどれだけの不安を持って日本に来ているのかという気持ちが今の私なら理解できる。私が日本出身ですと言うと知っている日本語や挨拶だけでも相手から少しでも日本語が聞こえると嬉しいし安心する。私は今韓国語と中国語を勉強中だが、他にも外国語に興味を持って色々な国の人と少しでも距離を縮められるように英語だけでなく外国語の勉強をこれからも続けていきたいと思った。



「海外経験を経て、反省とこれから」

理工学部理工学科 1年 杵尾卓也

私たちは今回オーストラリアのビクトリア州にあるメルボルンにて、ホームステイをしながらラトロブ大学の留学生専用のクラスに参加した。そこで私は多くの現地の学生や大人と出会い、自身の英会話能力を上げるとともに、他愛もない話からお互いの国や自身のことまで多くの会話を重ねた。しかし滞在期間後半にもなると、5週間という期間が英会話上達のためにはとても短く感じるようになっていた。ここでは失敗したことや良い経験だと思ったことを中心に、日本にはないオーストラリアの特徴を交えながら話していく。

まず初めに言っておきたいことは、目的をもって短期でオーストラリアに滞在する場合には必ず事前準備をするということ。私は、オーストラリアに行く前に多少国のことについて調べ万全の準備をしたつもりで向かったものの、いざ現地へ着くと通貨やクレジットカード、交通機関の仕組み、SIMカードの購入、そして現地での常識という主にこの4つの問題に直面した。

到着した初日、私はクレジットカードを使いキャッシングを行おうとした。現地の銀行口座を持たない我々は買い物や現金の引きだしにはクレジットが必須になるが、私は日本で海外キャッシングの手続きをしていなかったため現金引き出しをすることができなかった。さらに初めはなぜできないのかわからなかったため、現地についたばかりの私は英語で解決するのにとても苦労した。その上SIMカードも現地で購入するつもりだったので、クレジットの件もあり、すべてホストマザーに任せる形になってしまった。

次は交通機関の仕組みについて。オーストラリアには日本にはないトラムという電車が一定区間を路面電車のように道路の真ん中を走っていて、mykiカードを事前に購入しておくことで、トラムだけでなくバスや電車などのすべての交通機関を利用することができる。そのことを知らなかった私はホストマザーにmykiの購入まで任せきりになってしまった。そしてトラムの利用の仕方は理解したものの、電車やバスの利用ができることを知るのはそれから生活に慣れてきてからであった。

オーストラリアではほとんどの店は日本とは違い、早くに閉まってしまう。そして私のホームステイ先ではディナーの時間が決まっていて、平日はラトロブ大学の授業が終わってからの時間があまり残されていなかったため、放課後はあまり外で長居をすることができなかった。しかし私のホストマザーは親切で、事前に放課後の予定を伝えていれば、その予定に合わせてとてもよく対応してくれた。例えば、翌日の夜にメルボルンの町に行くことを伝えた時にはお勧めのスポットやマーケットを教えてくれて、帰りが遅くなりそうなことを伝えた時は夕食を作ってくれた。

を残してくれた。さらに帰りが遅くなったことに対して全く嫌な顔をせず私の心配をしてくれた。今考えても、ホストマザーには感謝してもしきれないほど助けられ支えられたような気がする。

また、オーストラリアは多国籍国家なだけあって日本人の方も多く在住している。ワーキングホリデーやオーストラリアでの就職、私たちのような留学生もいれば国際交際で現地に住んでいる人までいた。私はバディやその友達とよく食事に連れて行ってもらったが、その一つに英語や日本語以外の言語を話す人たちが来るパーティに参加した。そこではいろいろな言語を教えてもらい勉強になったが、当然何人か日本人もいて彼らに話を聞くと、現地で長期の滞在のためインターンをしていたり、バイトをしていたり、彼氏がオージーと一緒に現地に住んでいるという人がたくさんいた。それを聞いてとても別の国とは思えないほど身近に感じた。また現地の人や日本人とも仲良くなれて、日本で会う約束までしているほどだ。今は彼らにまた会うのが待ち遠しい。

本プログラムの目的の一つでもあるラトロブ大学での授業は、ほかの国の留学生と一緒に受けていたが、その他にも現地で仲良くなった学生の理系の講義に数回ほど参加させてもらった。その講義は当然すべて英語で行われるわけだが、出てくる単語一つ一つが辞書を用いないと理解できないようなもので、聞き取るのが難しく、それは今の自分のモチベーションにつながっている。今後将来海外の研究者とも会話をしたいと考えている私に、最低限必要な専門英語の知識の足りなさを実感させてくれるとても良い体験だったと感じている。

私はオーストラリアで多文化社会のありようと、多くの人種の方々と交流を交わし、文化の違いは目標通り私の価値観を変えてくれた。現地でできた友達や知り合い、出会った人すべてが日本では味わえないような経験をさせてくれた。私がこの留学で知ったものはオーストラリアの生活で、得たものは海外に住む人への関心だ。このプログラムで出会った人に感謝し、これからはより海外へ足を延ばそうと思う。プログラム前の目標を達成でき、とても良い経験であった。



「多くの学びと広い視野を与えてくれた5週間」

教育学部学校教育課程初等教育主免 2年 堀 素乃

私は佐賀大学オーストラリアプログラムに参加して、自身の視野が大きく広がったと感じている。私にとってメルボルンでの5週間はあっという間で非常に濃く、充実したものであった。このプログラムを通して色々な経験やたくさんの人々との出会いがあり、そこから様々なことを感じ学ぶことが出来た。海外の大学で授業を受けることやホームステイ先での生活、多くの留学生と友達になったことなど全てが新鮮で貴重な経験だった。そこで大きく3つに分けて私が留学で学んだこと、得たことをまとめたいと思う。

まずホームステイについて述べたい。私のホームステイ先はオーストラリア人の女性が1人で暮らす家であった。事前の知識としてオーストラリアは多民族国家ということもあり、現地生まれ現地育ちでも様々な国のルーツをもつ人が多いと知っていたため、バックグラウンドもオーストラリアということを知って驚くとともに、直で文化や料理、考え方を学ぶことができると嬉しく思った。ホームステイをし、一緒に生活していく中で、日本との違いを大きく感じたのはやはり料理である。日本では家で食事をするとき主に和食や洋食、中華料理を作る人が多いだろう。しかし、ホストマザーはそれらに加えてインド料理、タイ料理、マレーシア料理、イタリア料理等バラエティー豊かな国の料理を作っていた。このようなことからオーストラリアに住む人々にとって「外国」というのはとても身近なものであり、多文化社会といわれる理由に起因しているのではないかと思った。実際に、ホストマザーは近所に住む人々からそれぞれの国の料理を教えてもらって作っているのだと話していた。

その他に暮らしの中で新しく知ったことはオーストラリアにおける水の価値である。私が大学で授業を受けていた先生によると5年前までは水に関する規制があり、花の水やりや洗車は出来ず、節水を強く心がけていたとのことだった。現在は以前よりも問題は解決されたとのことだったが日本に比べて水の値段はとても高く、自動販売機では3.5ドル（約255円）で販売されていた。このことから、日本は水に恵まれている国だということを改めて実感することができた。入浴時に浴槽に浸かれることも十分な水があるからこそ出来ることなのだと思うとともに日々の生活を保つためにも節水を心がける必要は大いにあると感じた。

次に、オーストラリアのキャッシュレス社会について述べたいと思う。その名のとおり、マーケットのような場所でない限り全ての店でクレジットカードを使うことが出来た。また、日本のようにカードを差し込み暗証番号をうつという形式のものは少なくカードを専用の機械にタッチするだけで決済完了というものが多かった。現金で支払う場合と比べて時間の節約になる上にレジ

が混んでしまうことも避けることができ、また使った分はカード会社から1円単位まで明確な通知が届くためとても効率的だと感じた。キャッシュレスと同様にファストフード店にあるタッチパネルも日本にはあまり普及しておらず、私にとって新しい発見であった。わざわざレジに行くことなく、店内に設置されているタッチパネルで注文、支払いまで完了する。お客だけでなく店員にとっても便利なこのシステムはぜひ日本でも普及してほしいと思った。

最後に授業を受ける中で出会ったクラスメイトに視点を置いて話したい。私のクラスは中国、ロシア、マレーシア、ベトナム、オマーン、サウジアラビアからの留学生で構成されており、日本人は私ひとりであった。また、中東の国から来ている人々は大学を卒業し親となつてから英語を学ぶために語学留学をしに来たと話していた。そんな多国籍のクラスで5週間過ごし、クラスメイトと話す中で私の中の固定的な考えが少しずつ見え、新しい考えへと変わっていった。最も影響を受けたのは将来についての考え方である。私自身、教育学部に所属しているため、将来は教師になるものだと思っていた。しかし、友人と話す中で皆は多くの夢を持っていることや職業を志望するときに学部にとらわれない考え方をしていることに気づいた。彼らから、もちろん教師という仕事は素晴らしいが、夢を1つに決める必要はなく自分のしたいことをたくさん夢としてもって良いのだと言われ、自分がいかに狭い視野で考えていたのかということに初めて自覚した。このように、日々の会話からも国による考え方の違いを学ぶことができたと思う。多くの人が安定した収入を求めて職業を選択したり、ただ1つの夢を叶えようとしたりする日本人に対して、大きな視野をもち自身の人生を豊かなものにするために多くの夢を叶えようとする他国の人々、後者の考えを取り入れることは私のような学生だけでなく、今の日本にとっても必要なことではないのかと感じた。

これらのように、オーストラリアには日本と異なる文化や社会、そして様々な国からの留学生との交流によって私は多くのものを得ることが出来たと思っている。1年間の交換留学をする前に短期間の体験をしたいと思って参加した5週間のプログラムでこんなにも充実した日々を過ごし、素晴らしく、貴重な経験が出来たことを嬉しく思う。また、1年間も異国の地で過ごせるのかと不安で迷っていた長期留学に対して今はとても意欲的になることが出来た。それほどこの経験は私の人生において大きな影響を及ぼしたものであり、同時に広い視野を与えてくれたものであった。したがって、これからは次の目標である長期留学に向けて必要な英語力を身につけるとともに日々の勉学に励みたいと思う。



「留学で学んだこと」

農学部生命機能科学科 2年 田中 麻佑

私はラトローブ大学プログラムに参加して、日本では経験できない多くのことを経験することができました。また、他国の知らないことを知ることができました。特にオーストラリアは多文化社会なのでその点での経験が多かったです。街を歩いているだけで多文化を体感することができました。

まず、食で実感することができました。私のホストマザーはフィリピン出身の方でした。そのため、オーストラリア食が出てくることがあれば、フィリピン食が出てくる日もありました。一回だけホストファミリーのお友達の方と家で食事をする機会がありました。その方々は、オーストラリア出身ではありませんでした。そのため、フォークやナイフは使わずに手で食べている方もいました。実際に同じ食卓で異なる国の人と一緒に食事をすることで多文化社会だということを実感することができました。学校でも、食堂にはオーストラリアはもちろんですが、日本、中国などのアジア系もあれば、欧米系の食べ物もありました。それだけでなく、市内に行くとお肉が食べることが出来ない人のためのお店もありました。日本でも多くの外国の食のお店があるが、それ以上に多くの国のレストランが存在していました。他の国からやってきた人は自分の国の料理が外で食べることができ、またオーストラリアの人はいろいろな国の料理を食べることができるようになります。私も実際に、日本食を食べました。このような食だけでも多くの国の人が一緒に暮らせるために必要なだと生活していて実感しました。

次に、学校でも多くの経験をしました。私のクラスには日本人以外に韓国、中国、ベトナム、サウジアラビア、オマーン出身の生徒がいました。そのため、授業以外には様々な言語が飛び交っていたり、同じ英語を話しているが少し発音が違ったりしました。サウジアラビア人の英語は私にとってはとても聞き取りづらかったです。しかし一方で私の英語も通じない時がありました。自分自身が話している英語が日本語英語というのは自覚していましたが、日本で英語を話していても相手も日本人なため話せていると思い込んでしまっていました。また、クラスメイトがディスカッションの時間に自分の意見をスラスラと英語で話しているにもかかわらず、私は1、2文話すのがやっとでした。日本では英語を話す機会があまりないため全然対応ができませんでした。それでも、毎週、毎週その時間を重ねていくうちにだんだん話す量は増えていきました。今回、違う国の方々と英語で話したことにより、今の英語能力を様々な角度から自覚することができました。学校では、英語能力だけでなく、海外の国の特徴についても学ぶことができました。私のクラスのディスカッションの題材は自国同士の比較が多かったです。そのため、韓国などの日本に近い国

のことは知っていることも多いが、サウジアラビアなどの遠い国は知らないことだらけでした。名前と場所ぐらいしか知りませんでしたが、いろんな話をして行く中で、気候などの特徴だけでなく、日常生活や国の法律のことまで知ることができました。今回、出会わなかったら一生知らなかったかもしれないようなことを知ることができました。

そして、ホームステイでも多くのことを経験することができました。私は高校生の時に留学したことがあり初めてではなかったのですが、一人では初めてでした。以前したときは、「はい」、「いいえ」程度でしか話すことができませんでした。今回も以前よりは文章での会話をすることができたが、自分から話しかけることがはじめはできませんでした。またはじめは笑って流してしまう事もありました。しかし、私は英語を少しでも話せるようになりたいと思いプログラムに参加したため、毎日ホストファミリーと話す時間を作ろうと思い生活しました。自分から話を始めることができなくても、聞かれたことに答えて、会話を発展させるようにしていました。土曜日や日曜日にもホストファミリーと出かけることができる時は一緒に出かけて自分から英語を話す状況を作るように心がけました。また、一人でホームステイというところでも多くの経験ができました。一ヶ月以上も一人で別の家で過ごすということ自体初めてだったので、色々と不安な事もありました。それでも、自分のことは自分でし、時間があるときはホストファミリーの手伝いをしました。私はもともと行動力がありませんでした。しかし、今回一人その上海外で過ごしたことにより、行動力の向上だけでなく人として成長できました。

私は今回のプログラムに参加することをとても迷っていました。行くと決まってからも、不安しかありませんでしたが、本当に行ってよかったと思っています。充実した英語を学ぶための環境で5週間も過ごすことはもちろん日本ではできません。その上、留学に行く機会は就職でもあるものではありません。英語力向上を目的に行ったのですが、人として成長することができました。また、オーストラリアという多文化社会の国に行ったことにより、他の国では経験できないことを経験することができました。そして、自らの英語能力を自覚できたので、もっと勉強しようと思います。



「短期留学を通して」

理工学部 理工学科 1年 中野 将尊

私が5週間の留学で最初に驚いた事は、たくさんの人種がオーストラリアで生活している事です。元々色々な人種が生活している事は知っていたけれど予想以上にたくさんの人が居ました。初日に買い物行ったときに思った事は、全く変な目で見られてなく、少し驚いた事です。そのため居心地が良かったです。

ホストファミリーの方はニュージーランドから移住してきた方でした。ホストファザーはニュージーランドで仕事をしていて、あまり交流する機会はありませんでした。

ラトロブ大学では週20時間の英語の授業を受けました。ラトロブ大学はとても広くたくさん建物があつたのですが、大学に英語を学びに来ている人は、みんな同じ建物でした。英語を学んでいる人もまた色々な国から来ており、私が交流しただけでも、中国、韓国、サウジアラビア、オマーン、ミャンマー、ジャマイカ、などたくさんの方が居ました。授業を受けていく中で気づいた事は、日本人は、文法は出来るがスピーキングが得意ではない、一方サウジアラビアなどの方は、文法などはあまり出来ないが、スピーキングは出来ていて、教育の方法の違いだなと感じました。クラスメイトの人数は最大18人でした。これはオーストラリアの法律で決まっていた。しかし、すべての授業ではありません。授業スタイルはあまり日本と違いはなく、一つだけ違う点は日本より、自分の意見を発言する機会、ディスカッションの機会が多くありました。毎週プレゼンテーションがありすべて英語でした。授業をクラスメイトと受けていく中で感じた事は、サウジアラビアやオマーン出身の人たちの英語はアラビア語に聞こえる事があり、聞きづらい事がありました。私たちの英語も日本語よりの発音をしているのかなと感じました。

オーストラリアの公共交通機関は主にバスと電車とトラムでした。これらを使用するにはmykiという専用のICカードを購入しないといけませんでした。便利な点は、バスは色々な路線があり、住宅街の中を通るため家の前までバスが来る事です。ですが、バスの運転は荒く立っていると何度も倒れそうになります。そこは日本の方が良いと感じました。もう1つは、金、土、日曜日は電車が24時間営業であるため遅くまで遊べた事です。街も遅くまで賑わっており観光客の方もたくさんいました。特に治安が悪いと感じる事はなかったです。オーストラリアの道路では郊外の方は交差点に信号がなく、ロータリー方式でした。この点はとても省エネで良いなと思いました。やはり郊外は後から開発されただけあつて綺麗な街並みでした。街並みはアメリカの住宅街のようものでした。ですが聞いた話によ

ると郊外の開発が進んだ事により公園の野生のカンガルーがいなくなってしまう事態も起きていました。私が1番たのしみになっていたトラムはやはり便利でした。忙しい時間ではすぐに次のトラムが来て、とても便利でした。市内の方ではトラムフリーゾーンが設置してあり、無料で乗る事が出来ました。市内を移動するのにトラムはとても便利で、トラムあつての市内だなと感じました。

メルボルン市内に行ってみて思ったことは、開発がとても進んでいるなと思った事です。予想以上に高層ビルが立ち並んでおり、さらに今も建設中のビルがたくさんありました。昔と今がわかりやすく混合した街でした。高層ビルはガラス張りの建物が多くとても感銘を受けました。しかし、ホームレスの人々が所々にしました。学校の先生に聞いたところ、数年前は今以上にたくさんいたと教えてくれました。

現地の人々と話してわかった事は、日本の文化は有名である事です。私が話した人々は大体、日本のアニメの事を知っており、オーストラリアの人の方が詳しく知っているという事もありました。メルボルン市内やスーパーマーケットにはたくさんの寿司の店があり、驚きました。寿司は現地でとても人気でした。豚骨ラーメンの店が意外にも多く、一度食べてみたら味は大体似ていました。日本の都市ではやはり東京がとても有名で、洋服屋でも、Tシャツに東京と書いてありました。大学の人は簡単な日本語なら喋れる人がおり、昔、小学校とかで習ったとか言っていました。私は、もともと日本人は親切な人種だと思っていたのですが、オーストラリアの大体の人々はとても親切で日本人より親切だと感じました。話しかけたら笑顔で対応してくれとても嬉しかったです。ホストマザーの方もまた親切でゆっくりと話してくれました。英語は少し訛りが入っており、最初の方は、早く訛りがある為、全く英語を聞き取る事が出来ませんでした。ホストマザーと話していく中で、驚いた事は、日本は自殺者が多い事を伝え、オーストラリアでも自殺が多く、特に若い男性が多いと言っていました。

街に食事などに行つて驚いた事は、店員さんなどは母国語と英語を話すのは当たり前のように喋り、私の友達でも3ヶ国語を使っている人が沢山いて、海外ではバイリンガルは当たり前なのだなと痛感しました。



「オーストラリアでの体験」 農学部生命機能科学科 2年 井手綺音

私はこのプログラムに参加して、5週間で多くのことを感じ経験し、日本とは異なる文化に触れ多くを知った。中学3年生の時に修学旅行でシドニーを訪れて以来二度目のオーストラリアだったが、メルボルンはシドニーから飛行機で約1時間離れた場所にあり、気温も全く異なるため全てが初めての経験だった。

私たちは福岡空港を出発し、香港経由でオーストラリアへと向かった。合わせて約11時間のフライトを経てメルボルン空港に到着した。オーストラリアは南半球にあるため、日本とは季節が逆であることは行く前から知っていたが、空港に到着後想像以上の寒さに驚いた。空港に到着すると、ピックアップサービスにより私たち佐賀大学生はそれぞれのホームステイ先に送り届けられた。ホストマザーとは日本にいる時からメールでやり取りはしていたが、実際に顔を合わせたことはなかったため移動中もずっと緊張していた。自分のホームステイ先の家に到着すると、私のホストマザーは家の外で待っていてくれて、長時間のフライトを配慮してゆっくり休むよう声をかけてくれたり、サンドウィッチを作ってくれたりしたので徐々に緊張が和らいでいった。平日はその家からラトロブ大学まで通い英語の授業を受けた。大学の授業はオーストラリアに到着した次の日から始まり、現地のラトロブ大学の学生のような生活を体験することができた。事前に受けたテストの成績によりクラス分けが行われており、私のクラスには日本人の他に中国人、韓国人、オマーン人、サウジアラビア人、マレーシア人の学生がいた。こんなに多くの異なる国の人たちと同じ空間にいたことが今までなかったため、不思議な感じがした。クラスの中国人、韓国人、マレーシア人のほとんどが上海交通大学の学生であり、初日はそれぞれ大学の友達とお昼ご飯を食べたが、初日に上海交通大学の学生たちと次の日のお昼ご飯を一緒に食べる約束をすると、実際に次の日から一緒にお昼ご飯を食べてくれるようになり、そこから一気に仲が深まった。その他のオマーン人、サウジアラビア人の人たちは結婚してから大学に入学した人がほとんどで、私たちよりも年上であったため、妹のように可愛がってくれた。大学の授業は日本の授業と異なるところが多くあった。日本の大学の授業は生徒全員が教授の方を向いて話を聞くスタイルであるが、ラトロブ大学では何人かで一つの机を取り囲んで座るため、テーブルごとにコミュニケーションがとりやすく、実際に授業でもペアワークやグループワークが多かったため、日本よりも他の学生との関わりが多いと感じた。その関わりの中で他の国から来た学生との英語能力の差を感じた。グラマーやライティングの問題を解くと日本人の正解率が高いが、スピーキングは日本人よりもオマーン人、サウジアラビア人の学生の方が優れていて、その能力に圧倒された。また、質問

や自分の意見を授業中に自由に言える環境があり、分からないことをすぐに解決できる点で良いと思った。

放課後はクラスメイトとバドミントンや卓球をしたり、一緒にショッピングセンターに行ったりした。私は元々スピーキング能力を向上させたくてこの留学プログラムに参加したが、大学での英語の授業のみならず、色々な国から来たクラスメイトの友達とのコミュニケーションを多くはかったこともスピーキング能力の向上に繋がったのではないかなと思う。

土曜日、日曜日は学校がなく自由に過ごすことができたため、ホームステイ先の家からは遠くて平日はあまり行くことができないシティに毎週行った。シティはメルボルンの中で最も賑わっている場所でありたくさんのレストランや百貨店・デパート、マーケット、カフェ、博物館、美術館、図書館……などがあった。シティでは特にオーストラリアが多国籍国家であると感じることができた。例えば、レストランはピザ屋さんやハンバーガー屋さんをよく見かけたが、中華料理店や韓国料理店、日本料理店も多くあり、その他にも日本でも今大流行しているタピオカ屋さんが数多くあり、オーストラリアでも流行していることを知って驚いた。メニューを見てみるとベジタリアンの方のための料理を提供しているレストランも多くあり、宗教にも配慮しているのだと知った。また、中華街やイタリア街道が同じシティ内にあることから多国籍国家を感じた。

平日も週末も公共交通機関に大変お世話になった。オーストラリアの公共交通機関には主にバス、電車、トラム、タクシーがあるが、私はタクシーを一度も利用せず、バスと電車とトラムで移動した。バスも電車もトラムもMykiカードという一枚のカードをかざすだけで乗ることができ、特に私は1ヶ月間の定期を買っていたのでとても便利だった。オーストラリアの公共交通機関は日本と違う点がたくさんあった。一番印象的だったのはバスで、前のドアから乗車し、降りる際は前のドアからでも後ろからでも良く、日本のように停留所の表示がないため、メルボルンの土地に詳しくない私はマップで自分の位置情報を確認しながら目的地周辺に着いたらボタンを押さねばならなかった。トラムは路面電車のようなもので、金曜日から土曜日は24時間走っていて便利だった。逆に、お店が閉まるのは早くその理由をホストマザーに尋ねると、仕事を早く終わらせて家族の時間を大切にする文化があると知り、日本も学ぶ部分がたくさんあると感じた。

最後に、オーストラリアでの5週間は私にとってとても貴重な経験となり、以前より英語学習意欲が高まる良いきっかけとなった。将来的に多くの国の人たちと意思疎通が図れるよう努めていきたい。



「異文化に触れて」

教育学部 2年 小池麻友

私がこのプログラムに参加しようと思った理由は自分の英語力、特にスピーキング力を高めたいと考えたからである。SUSAPの他のプログラムに比べ五週間と滞在日数が長く、ホームステイなので一日を通して英語漬けの環境ということが魅力的だと思った。実際にプログラムに参加してオーストラリアの多民族文化や価値観の違い、英語学習への認識の変化など多くのことを学ぶことができた。以下では私が学んだことを述べていこうと思う。まずはオーストラリアの多民族文化についてである。事前指導などでオーストラリアは移民国家であり各国の文化が融合した国だということは知っていたが、実際に街を歩いている時やトラムに乗っている時に様々な言語が行きかっていることに気づき始めは驚いた。また、私のホストファミリーはイギリスにバックグラウンドを持つ人たちだったがほかの参加者のホストファミリーはフィリピンやイタリアにバックグラウンドを持つなど様々で、みんなでお昼ご飯を食べているときも各自持ってきているお弁当の中身が多様で、そういった些細なことに多文化を感じることができた。私がホストマザーにオーストラリア料理は何かと質問すると、正式なオーストラリア料理はなく各国の料理が互いに食べやすいように変化したものがオーストラリア料理などだと教えてくれた。他にもレストランに行ったときメニューをみていると宗教上食べられない食材がある人や個人で特定のものを食べないといった思想をもつ人々を考慮して記載がされており日本ではあまり目にすることがなかったため印象的だった。移民の人々によって形成された国なので各国の文化が主張しあい孤立してしまいそうだが、そんなことはなく互いの文化を受け入れつつうまく調和していることがすばらしいと思った。私のホストファミリーはよくオーストラリア英語を教えてくれた。例えば“Ta”や“See ya”などである。“Ta”は“Thank you”の省略形で“See ya”は“See you later”の省略形である。オーストラリアに滞在している間このフレーズを何度も耳にした。またオーストラリアンフットボールやクリケットなどオーストラリアンスポーツは祝日が設けられるほど人気で、多民族でありながらオーストラリア国民としての誇りを皆持っていると感じられた。

次に価値観についてである。これはオーストラリアの価値観を知ったというよりは他国の価値観を通して日本特有の価値観に気づかされたということである。例えば、“No”をしっかりと伝えることである。日本人は気を使う文化があるため自分の感情を正直に伝えることを避けがちだが、日本を出てみると気遣いという文化はなく逆にあいまいな態度をとることが失礼にもなることを知った。そのため私も自分の気持ちは正直に伝えるようにしていた。他にも、放課後友人たちとショッピングに行った際 17 時になる

とほとんどのお店が閉店していてとても驚いた。早く閉店する理由は早く帰って家族との時間を大切にするためだと聞き素敵に考え方だなと思った。また、公園やショッピングモールに行くとお父さんがベビーカーを押しながら散歩をしていたり、子どもと一緒に買い物をしていたり日本ではあまり見ない光景だったので印象的だった。

最後に英語学習への認識の変化である。今回のプログラムでは9時-11時、13時-15時のタイムテーブルで英語の授業を受けていた。韓国や中国、サウジアラビア、オマーンなど様々な国から英語を勉強するためにオーストラリアに来ている人たちと一緒に授業を受け、交流を深めることができた。授業は文法の学習などもあるがそれ以上にプレゼンテーションやロールプレイ、発音練習などスピーキングを主としたものが多く日本の英語教育との違いを感じた。日本や韓国の人たちは比較的、ライティングは得意だがスピーキングが苦手で、サウジアラビアやオマーンの人たちは逆にライティングが苦手でスピーキングが得意という印象だった。そのためグループワークなどでは互いの苦手分野を教えあい、高めあうことができた。また会話の中で自分が理解できない単語があったり、なかなか相手に伝わらない単語があったりして、それらの原因が単語の正しい発音が理解できていないためだということが多々あった。単語を知っていて視覚的には親しみがあっても音に親しみががないため理解できないのだ。これらを改善するために単語のシラブルやアクセントを学ぶ発音の授業は大切だと思った。

5週間を通して目標としていたスピーキング力もつけることができたが、一番成長した力はリスニング力である。初めは先生やホストファミリーが言っていることが単語、単語でしか聞き取ることができなかったのが最後には文全体を理解できるようになっていた。留学経験することによる伸びを実感し、長期留学をしたいと考えようになった。積極的に英語を話す機会を自分で作ることの重要さを感じ、英語学習への意欲を向上することができた。またこの留学を通して出会った佐賀大学の友人たちやオーストラリアで出会った友人たちと楽しい時間をともにでき、このプログラムに参加して本当に良かったと思う。



バディ達と訪れたメルボルン動物園

「オーストラリアでの5週間で得たもの」

理工学部理工学科 1年 伊東周昌

私は、オーストラリアのメルボルンという街のラトロブ大学に5週間の留学をしました。大学はバンドゥーラというメルボルンの中でも田舎の方の地域だったので、のどかで時間がゆっくり過ぎていく感覚に浸ってしまうような穏やかな場所でした。そして、オーストラリアは多文化社会であり、大学には多様な国籍を持った学生が当たり前のようにいます。特にラトロブ大学は比較的多くの留学生を受け入れているので、ファッションも食事もとても多様でした。日本では間違いなく変わり者だと思われるようなファッションをしている学生がいても誰も気に留めていませんでしたし、その雰囲気になかにいたので自分の価値観が変わっていくのを実感しながら生活できていました。中でも日本との「異文化へ向ける目」の違いはものすごく感じました。

その「異文化へ向ける目」の日本との違いについて現地の人と話したりもしました。自分は、日本はもっとボーダレスにグローバル化するべきだと考えていました。しかし、現地のほとんどの人が「グローバル化が善とは限らない」といった意見を持っていることに驚きました。そしてほとんどの人が、グローバル化に対して私が思っていたよりも深い意見を持っていました。話した相手が学生や若い人が多かったからというのも一つの理由と思いますが、オーストラリアが大量の移民を受け入れ多文化社会となる過程を経験したから、ということが一番の理由だと思います。そして、今まで同じ日本人同士のコミュニティにしか属していなかったのが、違ったコミュニティに属している人達は自分たちと大なり小なり違った意見を持ち、さらにそのコミュニティの中では意見が類似しているということを強く実感しました。それは様々なコミュニティがとても近い距離に混在している環境に滞在できたから、無意識に感じる事ができたのだと思います。

また、期間中平日に受けていた授業の中では、様々な国からの留学生と一緒に授業を受けました。その中には中国人、韓国人、カンボジア人、サウジアラビア人、オマーン人がいました。中には30代の人もいて、みんなが英語の学習のために来ていました。そして5週間で最も交流があったのはそのクラスメイトやその友人たちで、年齢関係なく交流しました。休日一緒に出かけることもありましたが、ランチも毎日一緒に食べていました。その中で、お互いの国の料理を食べられるレストランにも行きました。中でも、互いの国の文化や宗教の違いを話している時間は、また違った面白さがあり楽しかったです。さらに、5週間という期間の中に中国からきたマレーシア人の留学生の誕生日があったので15人程度の留学生で誕生日パーティが開かれていました。日本人も何人も招待されていて私も参加



しました。とてもいい思い出です。そして私は、そのクラスメイトのカンボジア人の留学生と特に仲良くなりました。彼は5週間だけの滞在となる私たちと違って、1年間の交換留学生としてラトロブ大学に来ていました。もちろん英語しか通じませんが、彼とはバスケットをしたり市内をまわったりして、帰る際には空港で手紙をもらいました。その手紙にはつたない日本語で私宛へのメッセージが書かれていました。宝物です。このエッセイを書いている今もSNSを用いて英語で連絡を取り合っています。

宿泊はホームステイで、ホストマザーはコロンビア出身でホストファザーは生まれも育ちもオーストラリアの生粋のオーギーでした。ホストマザーのMariaは学生の頃に留学生としてオーストラリアに渡り、その時にホストファザーと出会い結婚に至ったそうです。スペインの植民地だったコロンビアではパスタやスープを好んで食べるそうで、出してもらった夕飯はスープやパスタが多かったのですが、私に気を使って米を使った料理を何度か出してくださることもあり、その気遣いが本当にうれしかったです。私は、生活の中で何度も迷惑をかけてしまう場面がありましたがその度に「いつもいい子だから」と許してもらい、この5週間を通して最も感謝しているのは間違いなくホストファミリーです。

そして、この5週間で最も衝撃を受けたのは、スリランカからラトロブ大学に入学してきた生徒との会話です。彼の英語は2歳からの訓練でネイティブと同じレベルで生活や授業で困ることは全くないそうです。そして年齢は18歳で大学3年生でした。話を聞くと、スリランカでは飛び級が珍しくなく、高校3年間分をたったの1年で修了させて、卒業したそうです。彼ほど極端に早く高校生活を終える学生は少なくとも、飛び級自体は一つの学校当たり年に2、3人はあることらしいです。私は今19歳で化学者の道を志していますが、彼は18歳でもうすぐエンジニアになるための学士号を取得するという状況に危機感や多少の不安を覚えました。科学者として海外で仕事をしたいと思っていたのに、こんな人材が実際にいて、そして実際に会話して、本当に驚きでした。そしてこのように、多様な国籍の学生が集まるということは、たくさんの教育制度の下で教育を受けてきた学生がいるということでもあると感じました。

最後に、上記にあることのほとんどは調べれば取り込むことができる情報です。飛び級制度の下ですごく早さでエンジニアになっている人がいたり、日本より多文化で価値観が大きくも小さくも違ったりと、これらのことは何となくであっても私ですら知っていました。それでも実際に目の当たりにして、それらの環境に身を置くということがどれほどモチベーションや価値観に影響を及ぼすかは、情報を取り込むだけとはとんでもない違いがありました。この違いを知り実感することができたというのも大きな収穫だったと感じています。

「オーストラリア文化」

農学部生命機能科学科 2年 川野茉奈果

5週間という短い期間でしたが、現地での生活を通して多くのことを感じ、学ぶことができました。自分の英語力向上においても、日本で勉強しては学べないこと、できないことを経験することができました。その中でも、印象に残っている事柄をいくつか述べたいと思います。

出発前、私はオーストラリアの文化についての知識が乏しかったので、オーストラリア独自の文化を多く体験したいと考えていました。実際に現地で生活することでわかったのですが、オーストラリアは多国籍・多文化国家であるためか、これといった独自の文化を持っていませんでした。食生活において、カンガルーの肉を食べることこそ独自の文化に思いましたが、日本食や中華料理、韓国料理、ムスリムのためのハラール料理など、世界各国の料理店が多くみられました。また、イギリスの植民地支配を受けていたことが影響し、ヨーロッパ文化を思わせるレンガ造りの建物が多くありました。レンガ造りの大きな教会に行ったのですが、厳かな雰囲気とステンドグラスの綺麗さが印象的でした。私のホストマザーは、オーストラリアに独自の文化がないのは、独立してからの歴史が短く、植民地支配下の頃から移民が多かったからで、日本の長い歴史と文化はすごく素敵だと話していました。しかし私は、国内に数多くの文化が混在していることこそが、オーストラリアの文化だと考えました。多様性がありながらも、先住民を大切にするオーストラリアの文化は、とても素敵な文化だと思いました。伝統的な文化を多く持つ日本で育った私にとって、国独自の文化が無いということに衝撃を受けました。また、独自の文化を持っていることが貴重なこと、自分の固定観念で全ての国には独自の文化があるだろうと判断していたことに気づきました。

次に、現地の方々の人間性についてです。バスを降車する際には、多くの人が運転手に「ありがとう。」と伝えていました。また、ホストマザーと買い物へ行った際には、今日初めて会った人とまるで友人のように話していました。バス停でバスを待っていると話しかけられることも多く、オーストラリアの人々は親切でフレンドリーだと感じました。この国民性は、異なる国籍、文化を持つ人が認め合って生活することによって生まれたものではないかと考えました。夜になると市内こそ賑やかですが、少し住宅街に入ると、18時頃には閉店している店舗が多くみられました。来店客数が増加すると思われる時間帯の前に営業を終了するのか、疑問に思いホストマザーに尋ねたところ、オーストラリアの人々には、自宅で、家族と一緒に夕食を食べる文化があるようでした。そのため大半の店は早い時間に締め、残業をすることも滅多にないとのことでした。家族との時間を大切にしている、とても素

敵に思いました。

接客の仕方について、日本と大きな違いを感じました。日本では暇になると何かと仕事と探すのに対して、オーストラリアでは飲食店の従業員が自店の商品を食べていたり、携帯を触っていたりする場面が多くみられました。閉店時間が近づくと、お客さんがいても片付けを始め、大変自由な働き方だと思いました。しかし、これは私が自由だと思うのであって、当人にとってはこれが普通だと考えると、環境や価値観、教育など多くの事柄が影響して国民性や文化が生まれると考えることができ、大変興味深く感じました。国際化が進んだ社会で、ある程度の集団でみる文化だけでなく、個人の間でも少しずつ異なる文化、習慣を理解することが重要だと感じました。独自の文化を持つ国にとっては、相手の文化を受け入れるのと同時に、自国の文化を守る努力が必要になると考えました。

大学での授業は、先生ひとりに対する生徒の数が少なく、生徒の主体的な学習が求められました。様々な国からの留学生がいて、数人の留学生が青インクのボールペンを使っていました。なぜ黒でなく青色なのか不思議に思ったのですが、これも文化の違いによるものでした。日本は昔、墨を使っていたことから黒インクが公式とされ赤インクの印鑑をういいますが、国によってはコピー品でないことを証明するために、青インクが公式とされているようでした。授業でディスカッションをする機会が多かったのですが、スピーキングの練習以前に、私は自分の意見をはっきりと持つことができませんでした。他の学生は難しい話題に関しても自分の考えを持ち、それを主張していました。その姿はカッコよく、自分の意見をしっかりと持つことの大切さを感じました。しかし一方で、固形概念で物事を解釈すること、自分の意見を一方的に言うことは間違っていること、些細な言葉が差別につながる危険があることを感じました。特に文化が違えば、行動や言葉ひとつで、相手を不愉快にさせてしまう可能性は大きくなると考えました。

この短期留学を通して、普段と違う環境で多くのことを学び、新しい目標を得ることができました。身を以て経験したことをただの思い出にするのではなく、これからの自分の考えや行動に生かしていきたいと思います。



学校最終日クラスメイトとの昼食

「留学経験を通して」 経済学部経済学科 3年 高柳太植

私はラトローブ大学プログラムに参加して、1ヶ月という短い期間で多くのことを学ぶことができた。ここでは4つ紹介する。

まず1つ目は文化の違いについてである。私が行ったオーストラリアは移民国家であり、数多くの国と地域から様々な人種の人が集まる国である。そのため多種多様な文化があり、とても刺激的であった。例えば、現地の人達は器を手で持って食べないことや麺などをすすする時は音をたてない、靴を脱がないことなどと挙げればきりが無いほどだ。数多くの文化がある国で1ヶ月生活したからこそ、それを毎日見ることで自然と違和感は消えていった。私の英語のクラスにはオーストラリア、サウジアラビア、中国、韓国、ベトナムから来た留学生がおり、こういうのが自分の国では当たり前であるとか、食事や風呂について話す際にとても文化の違いを感じた。しかしそこで日本とは違うからと言って否定的な考えをするのではなく、その国々にある文化を尊重しなると理解しただけでも成長を感じた。

2つ目は日本で生活できることの有難みについてである。現地で1番それを感じたのは食事である。現地では様々な料理が楽しめる、毎日違う国のご飯を食べようと思えば食べられるのだが、一方で味は私の口にはとても合わないと感じた。現地の人に「このご飯は美味しいですか。」と聞いたところ、とても美味しいと答えられたため、是非日本に来て欲しいと思った。それを踏まえて、日本で毎日当たり前のように3食とても美味しい食事をとれていることの有難さに気づく生活であった。またその他の点については、オーストラリアのお店の多くは夕方まで閉まり、ご飯屋であっても0時頃には全て閉まってしまう。そのため夜に出かけることが難しいという声を多くの留学生から聞いた。日本ではコンビニエンスストアやファミレス、いくつかのスーパーは24時間営業が当たり前であると思う、しかし現地ではそれが当たり前ではないので慣れるのに少し時間がかかった。オーストラリアの人達は早く仕事を終わらせて家族との時間を大切にしたいと考える人達だと学ぶことができたと同時にそれもまた日本とは違う文化であり、日本の方が生活はしやすいと感じた。

3つ目は言語力についてである。やはり留学するにあたって、これが1番重要であると考えている。私はインターネットで留学に行く前に、1ヶ月でどれほどの言語力があるかということを調べていた。しかしそこには1ヶ月では意味がない、成果が出始めるのは半年ぐらい行ってからであると書いてあった。それを見て少し悔しくなった自分がいて、絶対に1ヶ月でも何か大きく成長して帰ってくるぞと意気込んで留学に向かった。結果から言うととても言語力は上がったと感じている。最初の数日はやはり日



本人同士で固まって日本語を話し、生活を共にしていたが、それでは留学に来た意味が無いと感じ、私は自分から他の学生に声をかけるようにしその人達と過ごそうと考えていた。その結果仲良くなったのは中国人留学生達であり、仲良くなった日をきっかけに休日含め、毎日行動を共にするようになった。日本人とあれば、お互い英語を話すことはないが、中国人の人達ということで会話をしようとするとならざるを得ない状態になるためそこで英語を慣らしていこうと考えていた。そういった生活を1ヶ月弱することができたため、毎日かなりの量の英語を話し、話したいことが伝わらないことは調べ、それを実際の会話で使うことで定着し、自分が思っていなかったほど英語を話せるようになっていた。また、ホストファミリーからも「来た時よりすごく英語が上達してる」と褒められとても嬉しかったのを今でも覚えている。また同じクラスには多国籍のクラスメイトがいるため、お互いの言語を紹介し合うということをよく行った。私はアラビア語、中国語、韓国語、ベトナム語も同時に少し学ぶことができ、毎日その人たちにあった際には各地の言語で挨拶をする習慣を作った。そうすることで親近感が湧き、仲良くなることができた。そういった面でも英語だけでなく、色々な言語を学べたという点でも言語力を伸ばすことができたと感じる。

4つ目は積極性についてである。日本人から外国人に対してのイメージはとても積極的であることだと思う。授業中私たち日本人はほとんど発言をせず、クラスメイトが答えるのをずっと待っている状況がほとんどであった。先生からも日本人はなんで発言しないのと問われたこともあった。確かに分かっているのになぜ答えないのだろうと考えることも多くなり、授業も終わりに近づいていた頃から少しずつ発言するようになった点で成長を感じた。また、言語力のところでも挙げたが、他国籍の人と話す際に積極的に自分から母国語を話したり、分からなければすぐに近くの人に聞いたり積極的に磨くことができた。こういった経験を通して違う国にももっと行ってみたいと感じた。

以上4点を挙げたが、まだまだ細かく挙げればきりが無いほどある。正直1週間や2週間の留学は生活に慣れるだけで終わってしまうため正直あまり意味が無いと思う。しかし慣れた上での生活ができた1ヶ月だったため、とても有意義に生活することができた。また、たくさんの外国の友達も作る事ができ、自分がその母国に行けば案内はしてもらえ、彼らが日本に来れば日本を案内するという約束もすることができた。実際来年には一番仲のよかった中国の友達に会うため、中国に行くことを決めている。

そういったことも含めとても貴重な体験をすることができたと同時に多くのことを学べ、人生においてプラスになったため大変良い機会であった。